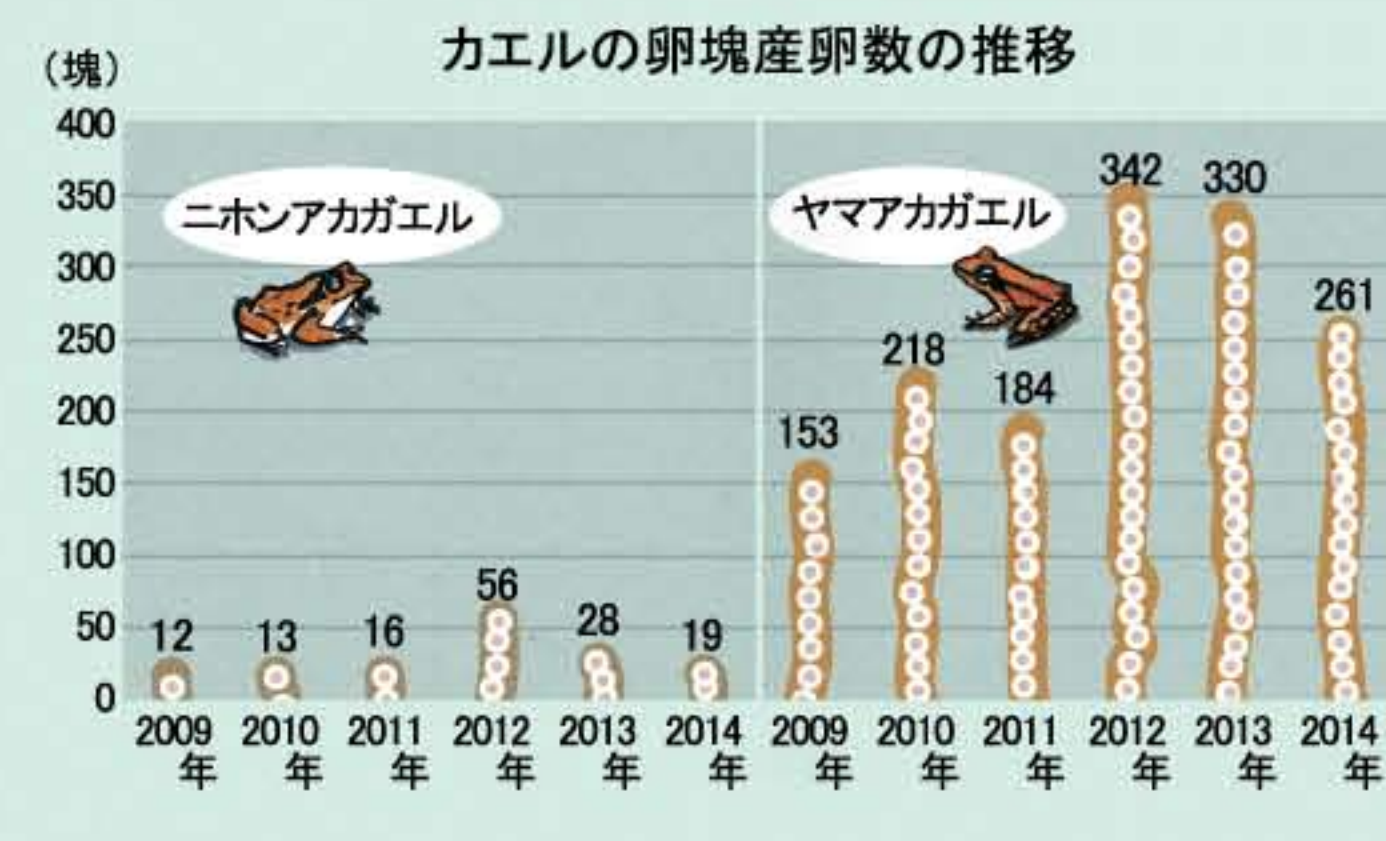
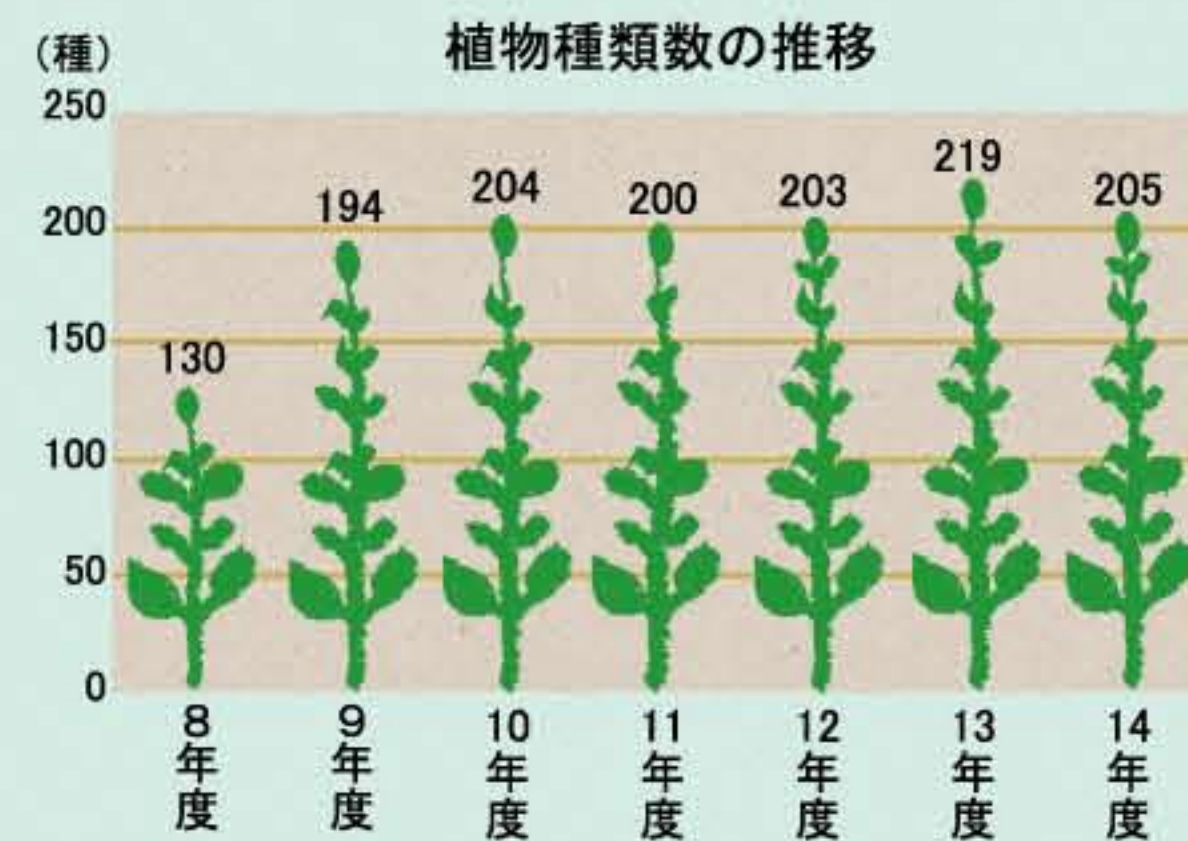


報告 モニタリング1000里地調査 新たな哺乳類も!

環境省モニタリング1000調査は、自然環境の長期的推移を全国1000か所で百年間調査するもので、天覧山では気候や里山再生等の自然への影響を把握するため、2008年秋から里地調査を開始し、植物、鳥、カヤネズミ、カエル、チョウ、ホタルの6種類の調査を行っています。今年で8年目に突入しました。

毎年2月に、1年間の調査結果報告会を行っています。2014年は、植物は大きな変化はない一方、チョウ、カエル、鳥、ヘイケボタルなどは落ち込みが見られましたが、動物は変化が大きいことはよくあり、原因は分かりません。

今回は、こうした結果も踏まえて、里山整備のあり方について意見交換しました。景観、安全、動植物の保護などの何を優先して進める



のか、どのように整備方法を決めるのかなど、熱い議論が交わされました。共通認識を築くには至りませんでした。こうした話し合いは継続していくことが重要かと思いましたが、このほど、新たに哺乳類調査を行うことが決まると連絡がありました。調査主担当者は岡登伸一さんになります。ほとんどの哺乳類は夜行性のため、獣道にセンサー付き自動カメラを設置して撮影します。以前に試験的に設置した際は、キツネとタヌキが写っていました。夜行性で実態が見えにくい哺乳類の状況が分かれば、天覧山の自然の状況がより分かってくると期待されています。

なお、調査への協力者を募集しています。てんたHPをご覧ください。か、下記へご連絡ください。

連絡先：ezh01701@nifty.com 大石 会員 大石 章



ホンドキツネ

はなのう市民環境会議 環境フェスタ2015

6月7日「はなのう市民環境会議」設立以来、初めて「環境フェスタ2015」が開催されました。市民会館大ホールでは各団体の舞台発表、ホワイエでははなのう市民環境会議や企業・団体など環境への取り組みの展示紹介、お楽しみコーナーなどのプログラムが組まれました。その中の「谷津田へ行こう！おいしいお散歩ツアー」の案内を浅見賢治さんと私が担当しました。市民会館から能仁寺山門前、天覧入り谷津を経由して東谷津に向かうコースです。参加者は大人10人と子供8人、ツアーの「ねらい」を「自然への親しみ」とし、「森林の恩恵」と「谷津田再生の理由」を要点としました。沿道では、カラムシの葉を手に載せ、これを叩いて「ポン！」と音を出す遊びに大人も子供も沸きました。また、わざわざ残っていたオオキンケイギクが特定外来種であることに「こんなきれいな花が」と驚きの声があがりました。谷津田ではシカ被害を受けた無残な姿のイネに顔をしかめてい

ました。森では「森の効用」について谷田 貝光克著作の「森林の不思議」の一部を紹介しました。生き物と違い、動けない植物は、わが身を守るために生産する各種の精気は、抗菌力や防腐の機能があること、この機能を薬用としていること、また、花粉をまいて欲しい虫には誘引作用のある精油を出すこと、これらが森林に放出され「森林のにおい」として気持ちよく感じさせ、ストレス解消にも効果のあることなどを紹介しました。谷津田再生は日本経済の発展とともに増えた農山村の埋め立てや工場誘致による里地里山の減少、農山村の人手不足による里地里山の荒廃と希少種の集中している現状を憂い、国として自然再生推進法を制定したこと、これを受けはなのう市民環境会議が発足し、谷津田再生作業をしていることを紹介しました。子供達にはやや退屈なツアーになった感もありますが、東谷津の美味しいピザがこれを解消してくれたようです。

会員 高沖義則



ヤツデキジラミはアリに甘露を与え、アリはヤツデキジラミを外敵から守り共生する。



巣網にかかったオオシオカラトンボ、ナガゴガネグモは布のような特殊な糸でぐるぐる巻きにして動きを封じ保存食とする。



笹につくアブラムシの甘露を吸うゴイシジミ、このチョウは花の蜜は吸わない変わり者



この花は奥にある蜜で虫を誘い、花粉を運んでもらう仕掛けだが、クマバチは横から穴を開けて盗み取る。



積み上げられた薪に産卵管を差し込み産卵を始めたヨツズジハナカミキリ。

●私の自然観察ノート 虫の世界へ

暇さえあれば、天・多の森(天覧山・多峯主山をとりまく野山)へ出かけている。ここが私の自然観察のフィールドなのだ。初めは大部分が開発予定地だった当地の、野草の花を記録しておこうと、花の写真を撮っていたのだが、そこにはいつも虫の姿があった。その虫達を見ていると、花粉や蜜を食べているものだけではなく、交尾しているもの、獲物を捕らえているもの、さらには獲物を待ち伏せているものなど虫の世界が広がっているのに気付かされた。この感覚は初めてのものではない気がした。そうだ幼少の頃、竹の先に針金の輪をつけて、クモの巣糸を何重にも絡めとって捕虫網を手作りし、虫を捕えていじりまわす、強く振った網にたたかれて砕けたトンボの胸の筋肉の大きさに驚いたりしたあの感覚だ。時にはセミの幼虫を捕まえて来て羽化する瞬間を見逃すまいと、眠い目をこすりながら見つめていた、死んだ事もないのに死んだふりしてまた生きる不思議に目をまるくした、忘れていたその感覚が50余年も経てよみがえったのだろう。気付くと網はデジタルカメラに変わってはいるが、私の観察ノートは虫の世界に分け入った記録に変わっていった。

山道や草地をぶらぶらと歩きながら、虫が見つかる立ち止まり、そっと近寄り虫の目線に合わせて跪いたり背伸びしたり、時には寝そべったりと、ありとあらゆるポーズを駆使して彼等に気付かれないようその行動を観察する。そこは不思議な世界への入り口だ。求愛、交尾、産卵、孵化や羽化、育児等の生活習慣、捕食者から逃れるための擬態や警告、共に助け合う共生や相手の体に乗取る寄生などなどだ。また、これらに出会うために積極的に近づく事もある。食草となる草木を探し出し、食痕のまわりを丹念に探す。草木の花や樹液の出る木を見つけておき、そこに集まる虫を見る事も...それらはいずれ深い驚きの世界につながっている。

これらの記録はレポートとしてシリーズ化し、てんたの会のホームページの東谷津ページに連載中だ。2008年から初めて200回目目前、ますます昆虫類のマニアックな姿に変貌している。面白いぞ虫の世界。
(会員 MY)



苔を自分の体に付けて大顎を大きく広げて獲物が通りかかるのを待つコマダラウスバカゲロウ幼虫。写真真ん中に大きく映っているがわかるかな。



すでに交尾を終え精子を体内に蓄えた雌は脚を上げて他の雄を拒絶するオオモンクロクモバチ。



クマバチを捕えたカマキリ、カマでしっかりと捕まえてどこからでもかぶりつく。



トンボの交尾はなぜハート型。雄は雌を捕えると、そのまま尾端を腹につけ生殖器から副生殖器に精子を移す。雌は尾端の生殖器を雄の副生殖器に当てて受精するためだ。モノサシトンボ

第4回「てんた里山バザール」開催!!

日時 10月18日(日) 午前11時~午後3時 雨天中止
会場 天覧山東谷津「ほとけどじょうの里」(アトム像のある公園を通り、天覧山登山口から右手に折れて山道を直進200m)
主催 NPO法人天覧山・多峯主山の自然を守る会(てんたの会)

出店者を大募集!!!

出店料無料

食べ物や雑貨、野菜等々、何でもOK。あなたの小さなお店を開きませんか。申込み: 詳細や出店希望の方は、下記へご連絡ください。042-977-1890 (早瀬)

